

生きる情熱

その夢が怪物だ

乙「君は今、『おれの過去はあまりに暗かった』と言った。」

甲「そうだ、おれの過去は少なくとも考えて歩んだ過去ではなかった。静かに話を聞きつつおれを分析してみると、四分のやけくそと、四分の享樂気分と、二分の憬れの夢とでしかなかった。そしてその全体が、幽霊で、横着で、真実らしい何ものもなかった。」

乙「それでいて心の中には何かを求めているのだ。」

甲「さびしいんだね。それにどうすればいいのかわからないのだ。十八九歳ごろのような青雲の志、てなものがおれから消えてから後は。」

乙「青雲の志、なんて妙な心だ。はるかな霞の中にえがいている自分だ。」

甲「ぼくは小学校ではよくできたし、皆がおだてたんだ、英雄主義で。ところが、人生の現実はおれにとっての宿命だった。貧しい家庭、父の病い、多くの弟妹、借金、そうした中へ引きずり込まれると、夢はだんだんこわされていった。夢がこわれるとともに自暴自棄が芽を出しはじめたのだ。」

乙「よくわかる。だが、人生の考え方が間違っている。」

甲「どこが」

乙「多くの若人が植えつけられ、さらに成功とか出世とかの名義で拍車をかけられて描き出す夢だ。あの夢が怪物だ。何がゆえに人間は有名にならなければならぬのだ。有名になつて社会の表面で躍らなければならぬのだ。そして、それができなければ君のように悲観しやけくそになる。それこそまちがいの中の大まちがいだ。親鸞聖人を見よ。その時代の人すら知らないほど人生に隠遁したではないか。そんなつまらぬものを追うた一生は、たとえ高位高官になつたところで、人生の本質にふれてはいないよ。」

人間になれ！

甲「確かに間違っていたね。」

乙「だから社会を見よ。金持ちが歩いたり、貧乏人が歩いたり、校長やら小使やら、月給取りやらが動いていて、人間がいらないじゃないか。おい君！ 素裸の人間になれ。人間が人間になる、君が君になるより重大にして価値ある大事業はあり得ない。」

甲「言われるとおりだ。おれにはおれがいなかった。」

乙「人間のほんとうの喜びは、まず自分が自分に帰るところから生まれる。」

甲「どうすればいいのだ。」

乙「自己清算だ。君の腸は複雑きわまつている。たたき直して、もつと単純にするのだ。さまざまな網や鎖が限りなく君を内に縛っている。全部切りすてるのだ。」

甲「話を聞いていると、一本ずつとられる気がする。」

乙「君の心にさし込んで来る智慧の光が闇を去らし、智慧の剣が切り除くのだ。つきにぜひ無くしてはならぬことは自己内省だ。現代人の悪傾向の一つはこの自己内省を棄てたことだ。本能的な野蛮人が、高度文明の中で高等な衣食住の中で跳つているのだ。」

甲「ぼくもそれだった。ぼくは怒りつぽくて、愚痴の多い人間だ。」

生きる情熱

乙「そりや君のような人間へつきものだ。ぼくは君を見てみると、三十にも足りないのに、老人に見えたり、女に見えたり、幽霊に見えたり、時には、妙に高慢に見えたり、つまりどれが君かよくわからない。腹も立てるらしいが、それであつて熱くはない、何だか冷たい。一口にして言う、情熱がない。情熱が。火が消えているのだ。そのくせ人一倍の感傷主義者だ。情熱のない人の人生はさびしい。」

甲「どこにその原因があるのだろうか。」

乙「愚かなんだよ。一口にして言えば、人生、社会に対する認識がはつきりしていないのだ。その日過ぎなのだ。君の生活の底には正しい論理がないのだ。ほんとうの情熱は、修養躍りの安価な涙や、感激からは生まれぬ。その場を去れば、あとかたもなしだ。真の生きてゆく情熱は正しい論理から生まれるのだ。この点から言えば、君は学ばないからいけないよ。学ぶということは、学校に行かなければできないと思つている。学校へ行けなかつたことに落胆して、今日ちつとも学ばない。たいへんな矛盾だね。おい君、しつかりせんか！」

甲「いやは何と言葉の出しようがない。」

自己清算

乙「ブリキで作つた切れ物なら、紙ぐらひは切れる。刃はついていたつてだめだ。ところが、本部の薪を割つている斧を見たまえ。刃の方が一分も厚みがある。それでも大きな木が割れるぞ。重みが割るのだ。感情は刃だ。重さは智慧だ。深い智慧が感情と一つになつた時、正しい意志が動くのだ。人生に対する強い情熱はかくして生まれるのだ。情熱の火が燃えてきたら、何かはできるさ。君のように自分さえ見えていない人間には、人生や社会は見えない。したがつて、社会的役割が与えられない。霞の向うの方に描いた夢の世界が実現したら、一攫千金で生きようなんて考えている人間は死んだがましだ。おい！ 足もとを見よ。村を、農村を、日本を、世界を、二度とはないぞ。生き甲斐を感じないか。それとも、あの向うの大金持の若さんのように、大学をすまして帰つて来て、ラジオと釣竿と音楽とスキーで毎日遊んでいたいのか。徹底的に一切を清算せよ。」

甲「……………」

如來は生きておはしますか

甲「先生、私は苦しくてたまりません。お話を聞いてみると、胸が暗くなつてきて、昨夜も眠られません。どうすればいいのでしょうか。」

乙「あなたは何歳になりますか。そして何年み法を聞きますか。」

甲「三十歳になります。十年ばかり聞いています。」

乙「あなたは、何ゆえに暗くなるか。苦しまねばならぬか知っていますか。」

甲「わかりません。ご講演を聞いていると、胸に一つの暗い塊ができて、それがだんだん太ってきます。」

乙「私がつけたのでも、外から加えられたのでもありません。あなた自身の病が現われてきたのです。」

甲「……………」

乙「あなたに問います。如来はましますか。」

甲「いられると思います。」

乙「重ねて問います。仏はいられますか。……………三度、四度、重ねて問います。如来はいられますか。」

甲「……………いられます。……………」

乙「それなら、この文を聞いてください。」

『汝は、仏教徒なりと言う』

あえて問う。仏はまことにましますか

なんじはつねに仏に仕えると言う

あえて問う。仏はまことに生きてましますか。

なんじはつねにみ法を説く。

あえて問う。まことに仏はありと言ひ得るか。

ああ。仏ましますに、かかる生活ありや

仏生きてましますに、かかる生活あり得るや。」

もう一度読みます。

……………

これが何と響きますか。」

甲「まあ……………」

乙「どうしましたか。あなたの過去の歩みが、仏ありと言ひ得ますか。」

甲「私はまったく如来を殺していました。私は、今、如来というものの実在する意味と、私の生活が如来を殺し盲にしていたことが、はつきりいたしました。」

乙「盲にしても殺しても、如来は盲でもなく、殺されもしません。ただその人の生活が死んでいるのです。しかも死んだ日暮しであることすら明瞭にしてはいません。自身がはつきりしない所に、どうして如来がはつきりしましょう。」

甲「私の過去はまったく如来を殺していました、今それがはつきりわかります。私は、如来を盲にしていたことすら知らずに、欲望中心の動きであったのです。」

乙「それはよいことに気がつきました。それでは、まことにあなたの過去はゼロです、棒引きであることがわかりましたか。」

甲「私の三十年の生涯はまったく無価値なものでありました。いくら聞いてもわからず、暗くなつてゆくはずです。暗くなつてゆくのは、私の貪欲生活の破綻が来たのです。」

乙「それで今、あなたは、如来をさらに求めますか。」

甲「いいえ、求めなくても如来は生ききつていられます。すべてが破れてしまった私の上に、その智慧、慈悲のすべてが、はたらききつていられます。」

乙「そうですそうです。そのあなたの合掌の手に、その念仏のところに、求道の中に、如来の願心は生ききつています。あなたは今、あなた自身に、はつきり会ったはずです。如来の真実をまともに見なければならぬあなたは、一切を清算せしめられたはずです。」

甲「私は今こそ、愚禿と言われた聖人のみ心がわかります。私の心の中には、我慢と欲とが横たわっています。それしかないのです。」

乙「それでは不安がありますか。胸に暗い塊でもありますか。」

甲「いいえ少しも。」

乙「あなたは、過去三十年が反古であつたように言いました。しかしはたしてゼロであつたでしょうか。過去の三十年にも、如来は生きていたのです。如来の聖なるおんはからいには、微塵の齟齬も狂いもなかつたのです。そしてあなたは、今、過去の歩みの一切を通して、はじめて如来に会うことができたのです。」

甲「ああそうですか、私の過去はゼロではなかつたのですか！」

乙「自力に死して他力に生きる、その現在の一念に更生したものは、死んでいたその長き過去のすべてが生かされたのです。聖人は、『眩劫多生のあいだにも、出離の業縁知らざりき、本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし』と、眩劫無始の我を発見し、師に会うた喜びを讃嘆していられます。さらにまた『久遠劫よりこの世まで、あわれみましますしるしには、仏智不思議につけしめて、善悪淨穢もなかりけり。』久遠劫の大悲を感銘していられます。それをまた『遠く宿縁を慶べ』とも述べられました。久遠の我を発見したものは、また同時に久遠の大悲を発見します。如来の智慧光によるのであります。」

甲「ありがとうございます。私は今、力強い生き甲斐を感じます。そして今まで聞いてきたことがすべて生きてきました。」

乙「私どもが、知人のない汽車の中に一人いようと、便所の中に入った時だろうと、二六時中、如来と一体なる信心の中に、その摂取を思うがゆえに、行住坐臥の生活をおろそかにすることができないのです。絶対に尊重せざるを得ないのです。その平素の生活は、無自覚、無信仰、無懺無愧の中に、如来を盲目にしていつつ、一席の法座によつて、功利的な極楽を求めたり、安心や信心や喜びや不動の生活を求むるがごときは、まちがいのまた甚だしいと言わなければなりません。」

甲「私がつたくそれだったのです。『仏は生きてましますか』にはまつたくまいつてしまいました。」

乙「如来は信心を通して生活とともにあるのです。いかなる苦悩の中にも無碍道が開かれ、人生のほんとうの相の中に、生きる喜びを得るのであります。限りなく求道しつづつ、如来の願の心を生きさせていただきましょう。」